

お褒めします。 国際関係、政治(国内政党、皇室)、経済、商業、産業、都市農村、建築・デザイン史、地域研究(国内外)、観光、メディア史、民俗学、軍事史、平和研究、言語学・異文化交流、語文・文化人類学、大衆文化、社会(労働・福祉・生活)、ジェンダー、スポーツ、芸能、芸術、ファッションほか戦前から現代までの変遷(『国際写真情報復刻版』)または戦後から現代までの変遷(『毎日グラフ復刻版』)についての研究者、大学図書館、公共図書館、専門学校

【毎日グラフ】とは

1948年7月に毎日新聞社より刊行された写真報道誌。判型や刊行頻度を変え、誌名も「アミューズ」と変えた後、2001年に休刊。政治・経済から芸能・音楽・スポーツなどの幅広いジャンルを紹介し、グラフ誌が競合しあった時代においても、その斬新なレイアウトとペーソス溢れる文章で注目を集め続けた。



本書を推薦します(敬称略)

江川紹子

神奈川大学国際日本学部特任教授

時代の「記録係」としての役割を發揮する「毎日グラフ」

ジャーナリズムには、ふたつの役割がある。

ひとつは、社会の「照明係」。社会の様々な出来事や隠れた事実を光を当て、同時代の人々に伝える。それは人が考える材料になり、民主主義を支える。もうひとつは、「今」を記録し未来に伝える、時代の「記録係」としての役割だ。次の世代が過去を振り返り、様々なものを学んで未来を構築していく資料となる。

新聞の場合、日々の新聞発行のほかに縮刷版を作り、アーカイブ検索の機能を整えることで、このふたつの役割を果たしてきた。ただし、新聞は文字中心に時々出来事を伝える。また、社会のすべてを記録できるわけではない。

一方、写真を中心にしたグラフ誌は、事件事故のほか、芸能、風俗に携わる人々の人間模様、ファッションを初めとする流行を通して、主に昭和の時代の大衆文化や世相、出来事を写し取っていた。『毎日グラフ』もその一つで、様々な日常風景や、発行当時は新しかった道具や商品などの話題も収められていて興味深い。今回の復刻によって、このメディアは「記録係」としての役割を存分に發揮するだろう。多くの大学や図書館に収められ、研究者や学生が未来にわたって、その記録に接することができるよう期待したい。

難波功士

関西学院大学社会学部教授

社会の諸相をヴィヴィッドに記録してきた『毎日グラフ』

かつて病院の待合室や銀行のロビーには、グラフ雑誌がおかれ、待ち時間の手持ち無沙汰を解消してくれていた。すべての隙間時間をスマホの画面に奪われている現在からは、想像もつかない光景だろうが、さまざまな場所で実に多くの人々がグラフ誌のページをめくっていたのである。中でも、戦後いち早く1948年に創刊された『毎日グラフ』は、その時々には多様なトピックスを取り上げ、幅広い読者に享受されてきた。1950年代に入り、テレビ局の開局ラッシュや週刊誌など雑誌ブームも起こったが、20世紀のビジュアル・コミュニケーションの歴史を振り返ってみたいとき、グラフ雑誌は一定の存在感を保ち続けてきたと言えるだろう。

社会の諸相をヴィヴィッドに記録してきたグラフ雑誌は、さまざまな研究領域において貴重な資料として利用可能なものである。この度の『毎日グラフ』の復刻によって、たんにメディア史研究にとどまらず、戦後日本の文化史・社会史研究において、さらなる進展や新たな展開がもたらされることを期待したい。

石田あゆう

桃山学院大学社会学部教授

戦後、メディアが創る「女性」イメージの変遷を知る貴重な資料

『毎日グラフ』が復刻され、当時の数多くの写真がまとめて見られるようになると喜んでいる。私は女性誌の研究をしているが、雑誌の表紙に掲載される女性は時代の象徴でもあり、眺めているだけでも楽しい。『毎日グラフ』も女性を表紙にたびたび起用している。戦後、「女性」を同誌がどのようなイメージで演出し、切り取ってきたのかを知ることができるだろう。

昭和20年代(1945〜54年)は、女性誌では写真に色を載せる多色刷り(多色グラビアと呼ばれた)が用いられていたが、昭和30年代(1955〜64年)には、より「リアル」な写真を用いた印刷への移行していった。視覚メディアとしての変化についても、「見る」週刊誌であった『毎日グラフ』であるから、戦後から高度成長期の誌面を眺めることで、私たちはより多くのことを読み取ることができるように考えると考える。「グラフ」という視覚イメージは、過去の世の中を私たちが想像する上で手がかりとなる資料である。全国紙である毎日新聞社が撮りためた数多くの写真によって編集された『毎日グラフ』は、日本や世界を記録した貴重なビジュアル・メディアである。

Martyn David Smith

Lecturer in Japanese Studies, School of East Asian Studies, The University of Sheffield.

Mainichi Graph.

As a historian of modern and contemporary Japan, I have found that the Mainichi Graph offers an invaluable window onto the social, political, economic, and cultural transformations of the 20th Century. The period of rapid economic growth from the 1950s to the 1970s, saw Japan recover from defeat and occupation in 1945 to become one of the largest economies in the world. This was also the period of the rise of the middle-classes, protests against the US-Japan security treaty, protests against the Vietnam War and the hosting of the first Olympics to be held in Asia in Tokyo in 1964. The Mainichi Graph is an authoritative visual guide to these events, often featuring English commentary. For my own work on the Japanese media and consumerism in the postwar period it has been extremely useful as a resource through which I can reconstruct and better understand the transformation of the everyday lives of the Japanese people. It can be difficult to access historical news media resources from outside Japan but, as a researcher working on Japan in the UK, online access to the database allows me to make use of the Mainichi Graph easily and conveniently in my work. My current research looks at the history of sound recording and consumerism in Japan and easy access to the Mainichi Graph is essential to this project. It is a useful and exciting resource for scholars working on Japan and East Asia around the world, and digital access means it is now even more convenient.

国内残存数の少ない稀覯誌【国際写真情報】とは

1922年から1968年まで国際写真情報社より刊行された写真報道誌。国際関係、政治、皇室、産業、社会問題、教育、建築、芸術、医学、宗教、旅行、芸能、スポーツ、科学、ファッション、娯楽、暮らし等幅広い分野を網羅。英文対訳記事も多数(中文対訳 1938年～1945年)あり。



本書を推薦します(敬称略)

姫田光義 中央大学名誉教授 中国現代史

『国際写真情報』の電子書籍版の発刊(戦前部分)を寿ぎ推薦する！

(一)『国際写真情報』(以下、本誌と略す)の第23巻(1944年)「大東亜戦争画報」を見て一驚した。それは私が小学校1年生のころ、夢中で見ていた雑誌だったのだ。高波を蹴立てて突き進む軍艦群、勇壮に飛び立つ荒鷲航空隊、「海軍の戦闘絵図」、それに日本支配下の大東亜共栄圏のアジアの人々の笑顔、さらには訳も分からずに拾い読みした東条英機首相の年頭演説等々。軍国少年への道をまっすぐに走り始めていた少年だ、興奮し感激しないわけがない。

しかし今、これを見てすぐに連想したのは、あの有名なドイツ大統領ヴァイツェッカーのドイツ敗戦40周年での「後になって過去を変えたり、起こらなかったことにするわけにはまりません。過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在にも盲目となります」という演説だった。歴史事実の欠乏と歴史認識の低落が主張される現今、本誌を眺めなおし読み直して、過去の歴史に思いを馳せる。

(二)本誌は1922年に発刊されたのであるが、それが普及される前に、まるで予見していたかのように翌年、関東大震災に遭遇し、悲惨な被災状況だけでなく甘粕大尉事件とその時に虐殺された大杉栄夫妻の写真が掲載されていて(朝鮮人大量虐殺は隠されているが)、あらためて天災とその後の人災を恰も今日のコロナ騒動で右往左往する世相と重ね合わせて思い起こされる。その後、日本は戦争への道をひた走り日中全面戦争から太平洋戦争へと突入することになるが、写真は軍隊の雄姿だけでなく、戦時下の一般民衆の姿、生きざまをも活写し、その他方で日本統治下の中国は満州・華北・上海、そして朝鮮・台湾・東南アジアなど、いわゆる「大東亜共栄圏」の民族の生活や風習が日本賛美・支援として紹介されている。それらは戦争末期(1944年)特集「大東亜戦争画報」、今日では敗戦として知られている幾多の海戦を紹介した「海軍の戦争絵図展」でさえ、有名な東条英機首相の年頭演説に観られるように「大東亜共栄圏・王道楽土」の建設を強調宣伝するものではあるが、その状況下で民衆の苦難の姿をも、何気なく写し出しているのである。

(三)私たち歴史研究者は「資料」を詳細に検討して歴史書を書くが、その資料はほとんどが文字であり当時の権力者有力者が書き残したものであるから、当然そこには作為(権力への付度)が働く。他方、写真や絵図もまた作為の下で残されたものではあるが、しかし写真の「怖い」ところは、作者や撮影者が意図しないうちに、当時の人々の生きざま、喜怒哀楽の表情などを活写し後世に伝えているのである。このことを念頭に置きつつ、歴史認識の形成のために本誌の写真をじっくりとご覧いただくよう、多くの現今の読者に推薦するものである。

井上祐子 公益財団法人政治経済研究所主任研究員・視覚メディア史研究

グラフ雑誌研究・メディア史研究にとって画期的なものであり、大きな朗報

1920年代は大衆社会化が進んだ時代であり、映画やポスター、ラジオやレコードなど、人々の目や耳に訴えかけるメディアが発達した。写真文化もその中で花開いた。写真の芸術性が追求されることも、グラフ雑誌や写真ニュースなどの写真印刷物が情報伝達の一角を担うようになった。

『国際写真情報』は、この「情報を見る・新しい時代を牽引するグラフ雑誌の一つ」として、1922年(大正11年)8月に創刊された。同年には『国際画報』(大正通信社)が、翌1923年には『アサヒグラフ』(朝日新聞社)や『週刊写真報知』(報知新聞社)が登場し、しのぎを削りながら、発展していった。

アジア・太平洋戦争末期の空襲による社屋と印刷所の焼失、敗戦後の物資不足などにより、約6年の休刊を余儀なくされたが、『国際写真情報』は創刊から1968年に幕を閉じるまで、40年以上にわたり、内外のさまざまな情報を読者に伝え続けた。同誌は世界各国の人々の生活、文化、娯楽、科学、産業、災害、事件などの情報をリアルタイムで伝えるとともに歴史的な絵画や芸術品、建造物などの紹介にも力を入れ、それらの写真もふんだんに掲載した。また創刊当初からカラー印刷を駆使しており、その美しさも魅力の一つである。同誌の誌面からは、人々の目を楽しめながら、情報を伝え、知識・教養を涵養しようとしていたことがうかがえる。

メディア史研究は、メディアの発展を跡づけ、検証する学問であると同時に、メディアの中から歴史を読み解く学問でもある。それゆえ、多岐にわたる情報を含みこんでいるグラフ雑誌は、メディア史研究の重要な資料である。しかしながら、グラフ雑誌研究は、他のメディアに比して遅れている。その主な原因の一つが、資料へのアクセスの悪さである。復刻版の刊行は一部の有名雑誌にほぼ限られており、現物の入手閲覧が困難なものも少なくない。資料のデジタル化は、グラフ雑誌研究にとって喫緊の最重要課題である。

この度の『国際写真情報』の電子書籍化は、グラフ雑誌研究・メディア史研究にとって画期的なものであり、大きな朗報である。さらにまた、社会学や美学など多様な分野の研究にも有用であると思われる。多くの研究者・読者に利用されることを願ってやまない。

蔣豊 北京大学客員教授／『人民日報海外版日本月刊』編集長

『国際写真情報』がもたらす新たな発見に期待

本年は中国共産党成立100周年の佳節にあたる。党成立初期のリーダーには、陳独秀、李大釗、周恩来など日本留学経験者が多く、日本とのゆかりが深い。しかし、中国と日本は、不幸な戦争時期から新中国建国を経て、1972年に両国の国交が回復されたまでの間、様々な分野での交流は現在ほど盛んではなかった。そのため、交流を物語る史料も少なく、私自身、近代・現代史についての著作があるが、まさに研究者・学者にとって、この時期の史料の復刻が待ち望まれていたと言えよう。1922～1968年にかけて、日本がアジア諸国と密接な関係でつながっていた時代を活写した『国際写真情報』は、近現代のアジア関係史を理解するうえで貴重な史料になりうると考える。そして、大正、戦前、戦中、戦後の国際関係、政治、社会、文化、芸術を伝えるグラフ誌として、『アサヒグラフ』との双璧をなす貴重な媒体の復刻、しかも電子書籍として紙面細部の拡大や検索機能により、新たな発見をもたらすかもしれない。

森暢平 成城大学文芸学部教授

時代の雰囲気を理解するためにグラフ誌の存在は欠かせない

明治期から画報と総称されたグラフ誌は存在していたが、写真製版技術が向上した大正期、印刷媒体に頻繁に写真が登場するようになった。また大正期には、大衆と呼ばれる人びとが本格的に登場し、娯楽や娯楽を求めるようになった。さらに、第一次世界大戦終了後、国際秩序の大転換が起こり、人びとの関心は、国際社会のなかの日本に向けられるようになっていった。『国際写真情報』はこうした時代の変化に着目した石原俊明氏が1922年(大正11年)に創刊した、日本初と呼ぶにふさわしい本格的グラフ誌である。

創刊二年目(1923年)の新聞広告には、「世界の大勢は勿論、学問芸術、娯楽、流行などあらゆる高級常識は、本誌の一覧によって涵養される」とある。「本誌の題号及び内容を模倣せる低級誌」があるため、「国際写真情報」の六字に注意するようにとの呼びかけもあり、石原氏の成功に似たような出版企画が続出したことが分かる。フォトドキュメンタリーの隆盛は、カメラ産業の中心であるドイツ、それも1920年代中盤以降というのがメディア史の定説である。しかし、ドイツでの流行より先に、写真を中心にしたグラフ誌を創刊し、国際・娯楽・教養・芸術というさまざまな要素を一覧できるものにした石原の先見の明は驚愕すべきものがある。

メディア史を研究するものにとって、グラフ誌の大きな魅力は、活字メディアの記事や、教養人の言説だけでは、見落としがちな、思わぬ些末な事実を、写真の細部から発見できることである。気が付かなかった人びとの反響に出会うこともある。当時のメディア空間を再現し、そのなかに自分自身を浸すことによって、時代の雰囲気を理解するために、グラフ誌の存在は欠かせない。戦中・戦後の一時期を除き、大正から昭和の半世紀近くにはわたって近代日本を記録し続けた『国際写真情報』は、メディア史の重要な史料である。多くの研究に利用され、豊かな成果が生まれることを期待したい。

朴祥美 横浜国立大学都市イノベーション学府・研究院准教授

ポストコロナまでも視野に入れた試み

この度、『国際写真情報』復刻版が電子書籍として刊行されたことを、誠に喜ばしく思う。歴史文献はその劣化しやすい性質から、原本へのアクセスが難しく、研究者たちは復刻版に助けられてきたところがあった。コロナ禍においては、その復刻版でさえ閲覧に制限がかかっている現況である。こうしたなかでの電子版刊行は、ポストコロナまでも視野に入れた試みと言えよう。

日本工場の『ZOOZ』が戦時中の時代背景を鮮明に映し出したとすれば、国際情報社のグラフ誌『国際写真情報』は戦後の様子まで現代の読者に紹介している。1922年から1968年にかけて刊行された『国際写真情報』は、戦前と戦時中、戦後にいたる、近現代日本におけるきわめて重要な時期を取り扱っている。激動の時代を生き抜いた一般の人々の日常をとらえた文化や芸術の写真画報は、それ自体とても貴重な歴史記録であると同時に、当時の日本が持っていた印刷産業の科学技術をも表している。

『国際写真情報』の特徴たる面は、その誌名が示すような国際性にある。同誌には、日本の国際関係や東アジア関係を取り扱った報道写真および記事が多く掲載されており、英語と日本語のバイリンガル・ニュースは明らかに海外の読者をまで意識していたと思われる。とりわけ日韓関係においては、韓国戦争の休戦協定、在日朝鮮人の北朝鮮送還、李承晩と朴正熙政権下の韓国情勢など、日韓国交正常化に至るまでの陣痛や両国間の緊迫した様子がリアルに浮き彫りになっている。こうしたビジュアル資料が電子書籍化されたことによって、今後、より多くの研究者・社会人・学生の目に広く届いていくことができれば幸いである。